

図27 4区第2面SD4001平・断面及び出土遺物

4区溝 SD4005

4区①西部で検出した落ち込みである。埋土はラミナが発達するシルトで占められる。溝としての略号を与えているが、平面形が歪であることや、前述したSR4001中層土器群と接合する資料がみられたこと、ラミナが認められる埋没状況などから、SR4001中層の流化作用に伴い形成された小規模なクレバス状の落ち込みと考えるため、ここで報告する。

273～292は出土遺物である。273～277は須恵器蓋杯、278～280は須恵器有蓋高杯である。281は須

器広口壺の胸部片。これらはTK23～47型式併行期の所産と推定でき、SR4001中層上位出土の須恵器群と同様の年代を示す。282.283は土師器杯、284～290は土師器高杯である。291は精製された胎土をもつ土師器直口壺、292は土師器鉢である。

7区旧河道 SR7001

4区から北へ続く旧河道であり、調査区全体が旧河道に相当する。全体の層位区分は上層、上層下位、中層上位、中層下位の4つに区分して調査を行い、多くが4区SR4001での所見と共通するものである。

上層は、南壁断面の7層及び断面2層とする灰色黄褐色極細砂～シルトを基本とする。同層中には灰色シルトの偽礫を多く含み、4区SR4001と同様に耕作土と考えられる。7区では9世紀末から10世紀前半までの遺物が含まれる。また、南壁断面では耕作土である7層下位がやや窪み、ラミナ状に炭化物粒を含む層位が複数確認される。後述する上層下位の堆積完了後に小さな窪地が残されていたと考えられる。南壁7層より下位の8～17層の堆積状況からは、旧河道埋積後の窪地が、雨水等により周辺の人的活動によって生成された炭化物を巻き込みながら、漸移的に埋没していくことが窺える。

上層下位は、砂礫を多く含みラミナの発達した粗砂からなる層相を示す。南壁断面では、中層を抉り込むように粗砂層がみられ、流速の速さを物語る。5世紀後葉～末葉、7世紀中葉の遺物が含まれるが、前者は中層からの混入品と考えられる。

中層は、前述した上層下位に開析された層位であり、調査区西端付近に検出された。灰黒色系の繊粒砂～粘土を主体とし、微粒の炭化物をやや多く含み、顯著なラミナの発達は確認できない。堆積物の様相及び構造から、後述する下層堆積完了後の凹地が緩やかに埋積した際の層位と考えられる。5世紀後葉～末葉の遺物を包含している。

下層は、灰色系の粗砂～極細砂であり、前述した1区から4区の基本層序では中層に相当する。本調査区内では410の杭材以外は出土していないが、1・2区で出土した遺物の年代観から、古墳前期を中心とした堆積時期を想定することができる。

293は土師質土器小皿であり、上層上面の遺構検出時に出土した。本来はより上位の堆積層に帰属する遺物と考えられる。

294～308は上層からの出土遺物である。294.295は須恵器蓋で、8世紀前葉～中葉の所産。296.297は古墳時代タイプの杯最終型式であり、7世紀中葉に比定される。298は縁軸陶器碗の小片であり、9世紀末葉～10世紀前半の資料と考えられる。299は無蓋須恵器杯で、7世紀後葉の所産とみられる。300～302は須恵器蓋杯、303は須恵器取手付椀で、5世紀後葉～末葉の資料であり中層からの混入品と考えられる。304は土師器直口壺。305は弥生土器甕で弥生時代前期後半の資料である。306は有孔土錐。

307は滑石製模造品で、劍形とみられるが形態はかなり弛緩したものとなっている。308は碧玉製管玉である。307.308は中層からの混入品である可能性が高い。

309～344は上層下位からの出土遺物である。309～312は須恵器蓋杯で、7世紀中葉に比定される。322～325は須恵器無蓋高杯、327は須恵器甕であり、309～312の蓋杯と同様に7世紀中葉に比定される。これらは本層位の堆積年代を示す資料である。313～318は須恵器蓋杯、326は須恵器無蓋高杯、319～321は須恵器取手付椀であり、これらは中層からの混入資料と考えられる。

328.329は土師器杯で、329は精製された胎土を用いる。330は土師器椀形高杯。331は土師器瓶であり、取手は挿入法で接合される。これらの土師器資料群は、古層を示す須恵器に伴う資料であり中層上位からの混入品と考える。332は動物形の土製品である。

333はヒノキ属の大型部材である。上方の2孔は、枝節が欠落した際に生じており、加工によるものではない。法量や形状からみて、建築部材である可能性が高い。334は腐食が進むが、形態からみて織機中筒であると考えられ、樹種はヒノキ属である。335は加工棒であり、頭部の加工状況から垂木の可能性もある。

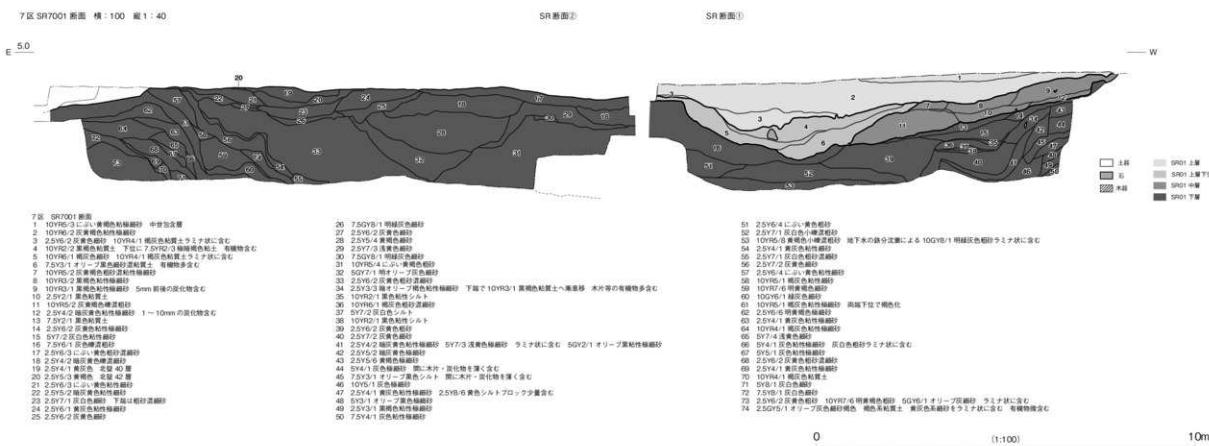
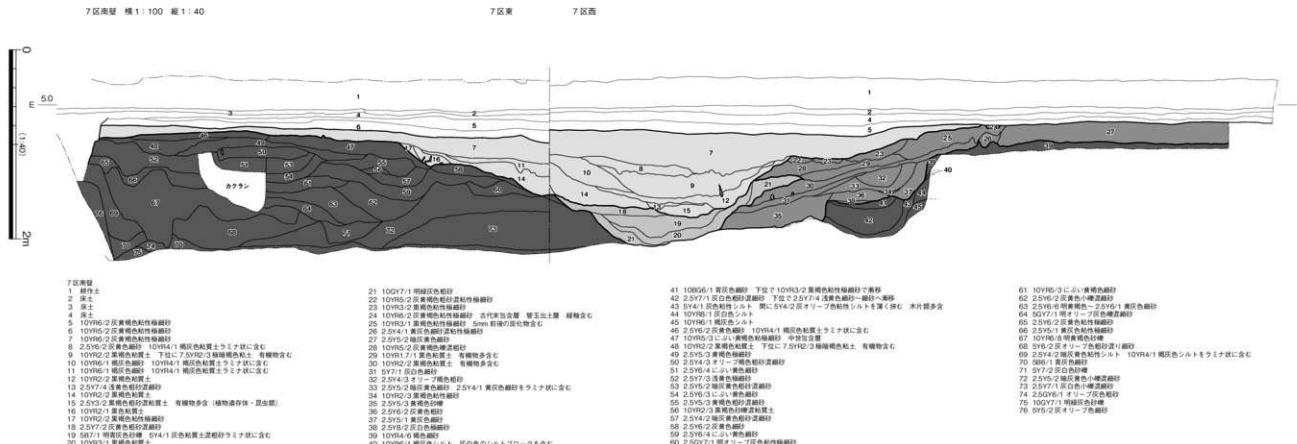


図28 7区 SR7001断面(南縁含)

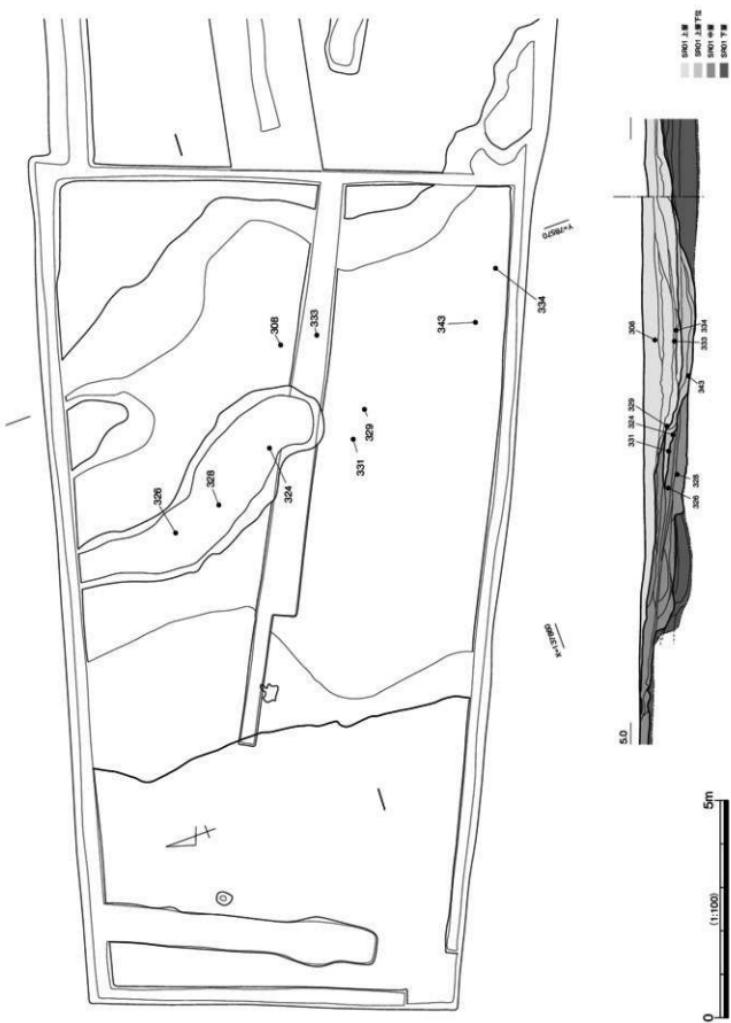


図29 7区SR7001遺物分布(上層・上層下位)

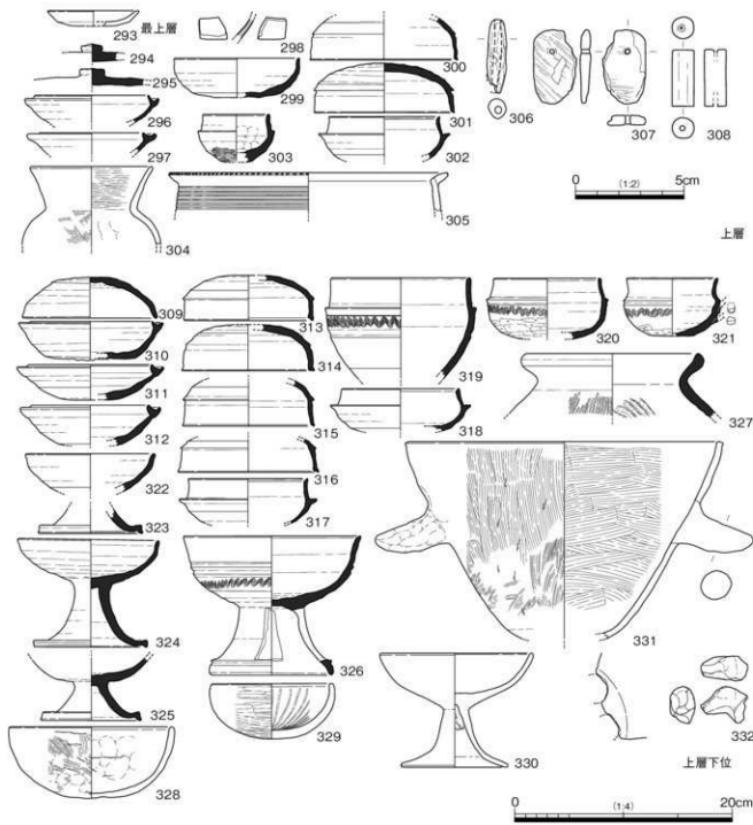


図30 7区SR7001 上層・上層下位出土遺物

336は墨書が確認できないが、形態から荷札木筒と考えられ、樹種はスギである。7世紀中葉の土器群に伴う可能性が高く、この想定が正鶴を射たものであるならば、県内でも最古段階の資料となる。

339は樹皮巻、340は小片ながら劍形と考えられ、樹種はスダジイである。341は劍形、342は刀形とみられる。樹種は341がアカガシ亜属、342がアスナロ属である。343は劍形にも見えるが、他の資料と比較して大型であり、不明と報告しておきたい。344は部材である。

345～409は中層上位出土資料。345～380は須恵器蓋杯。5世紀後葉～末葉の資料群と考えられる。

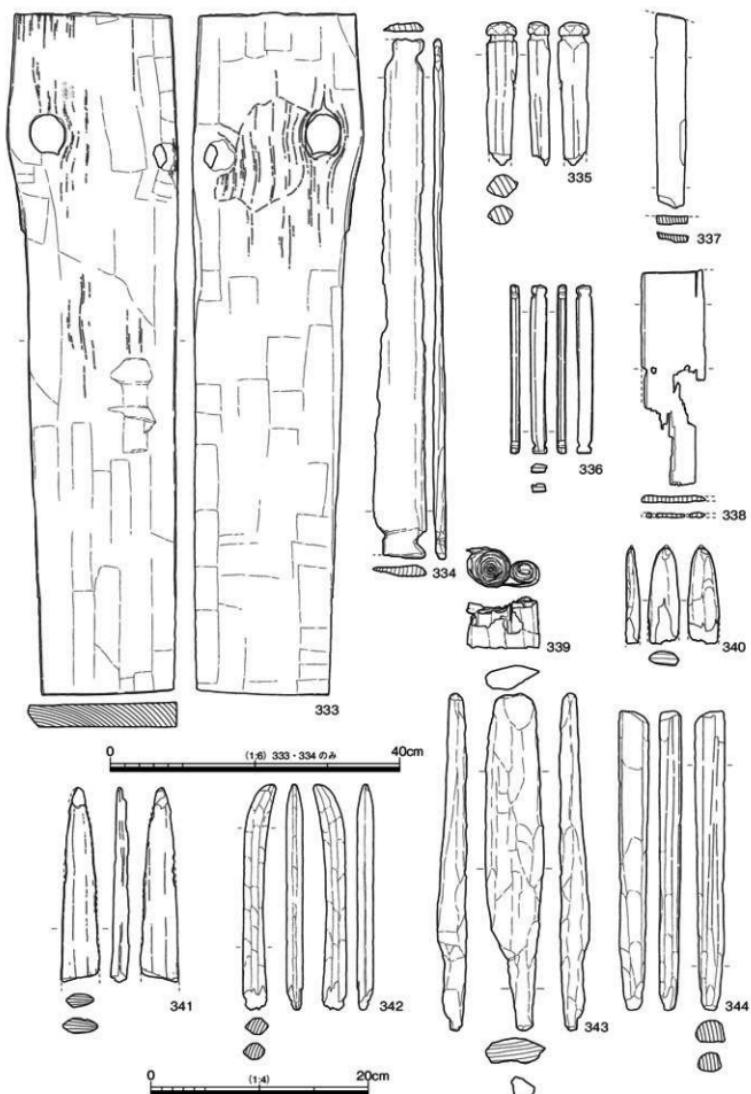


図31 7区SR7001上層・上層下位出土遺物(木器)

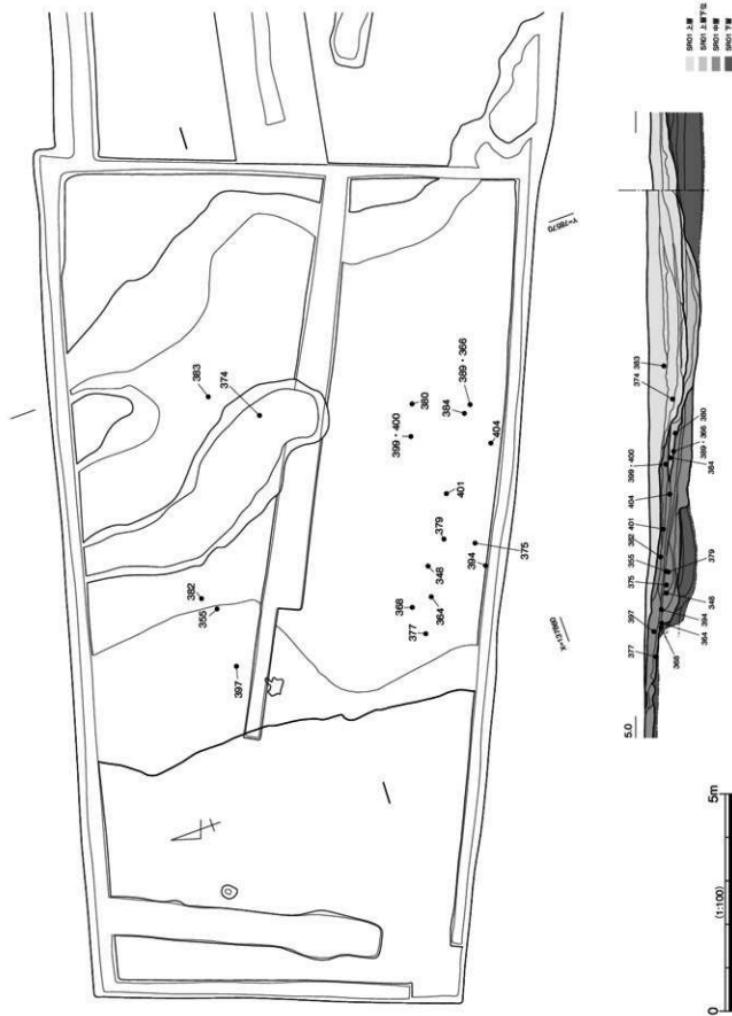


図32 7区SR7001遺物分布(中層)

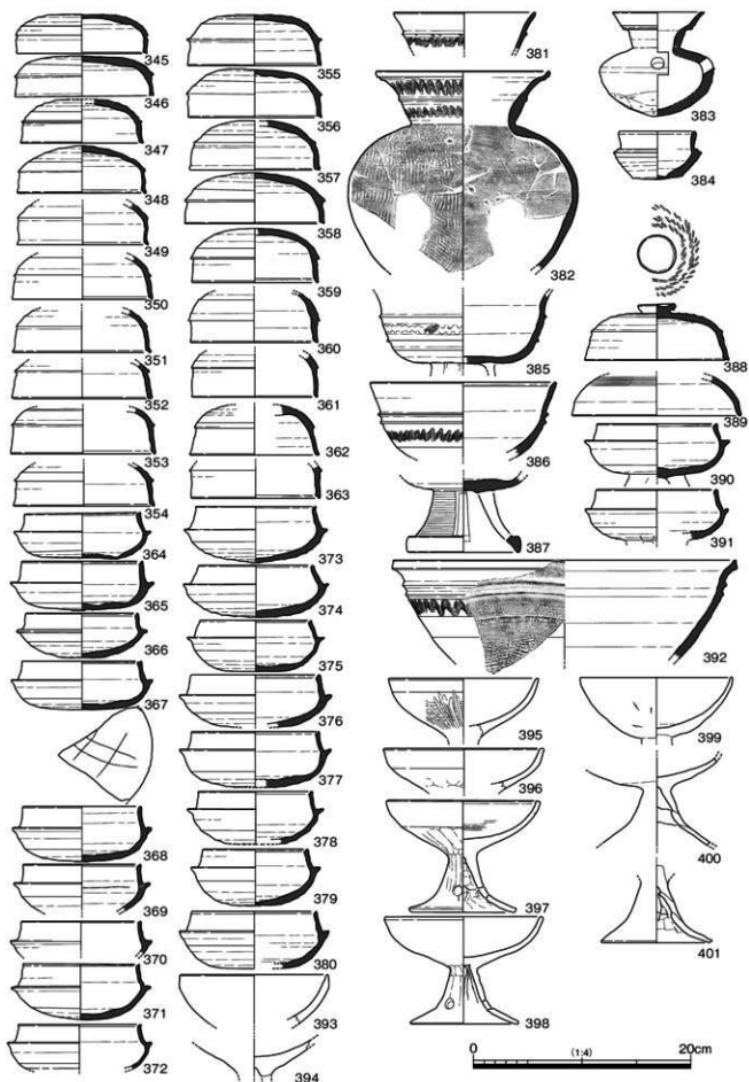


図33 7区 SR7001 中層出土遺物(1)

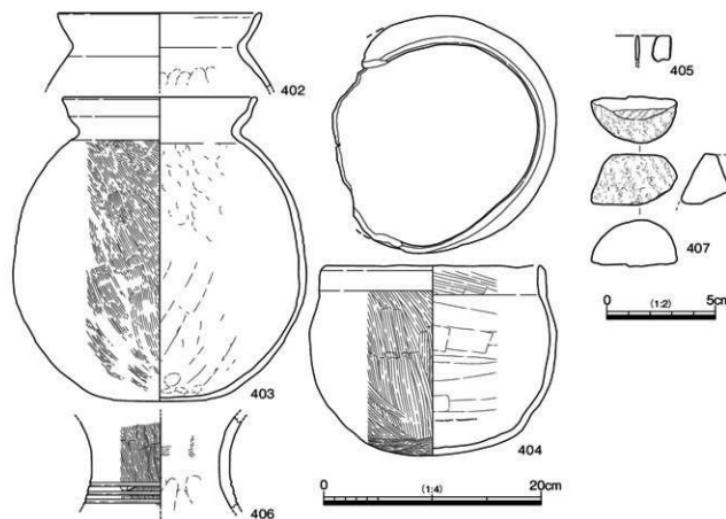


図34 7区 SR7001 中層出土遺物(2)

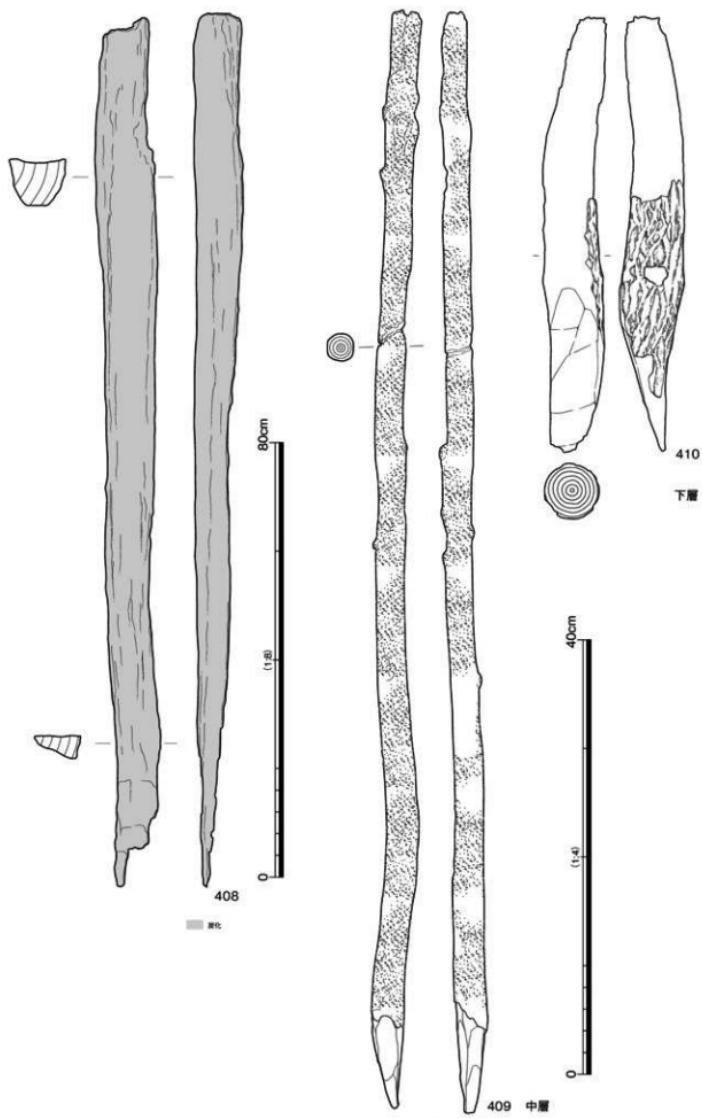


図35 7区SR7001中～下層出土遺物

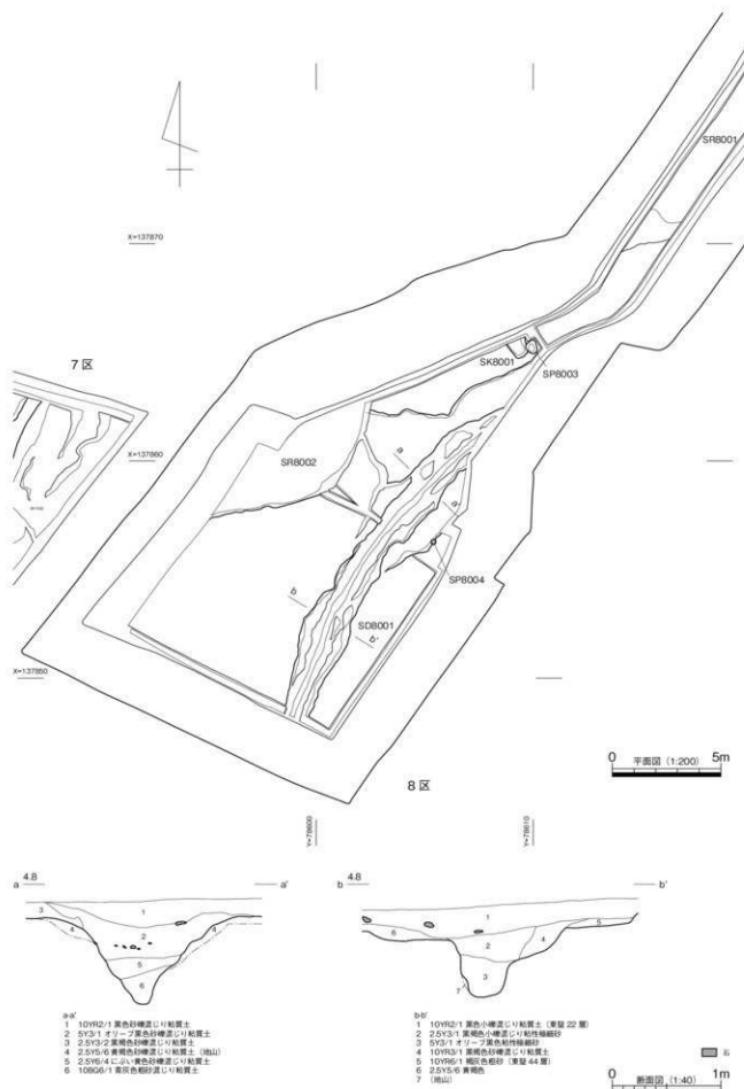


図 36 8区 SD8001 平・断面

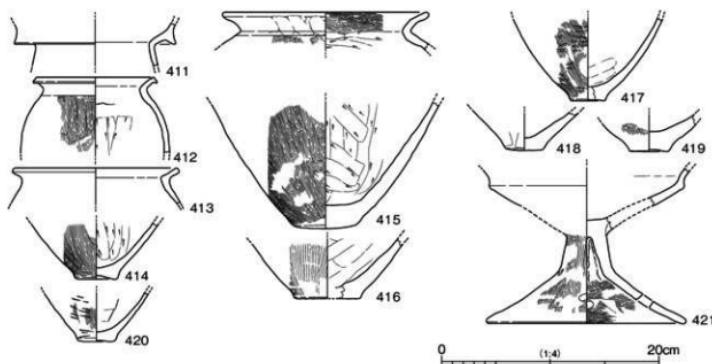


図37 8区 SD8001出土遺物

381. 382は須恵器広口壺、383は須恵器甌、384は須恵器取手付瓶である。385～387は須恵器無蓋高杯、388～391は須恵器有蓋高杯、392は須恵器器台である。これらは345～380の須恵器蓋杯と同様に、5世紀後葉～末葉の所産と考えられる。

393～400は土師器楕形高杯であり、401も杯部が残存していないものの、楕形高杯の脚部である可能性が高い。屈曲形高杯を欠く様相は、前述した5世紀後葉～末葉の須恵器資料群に伴う高杯の様相を示していると考えられる。402.403土師器甌、404は土師器鉢であり、上からみて口縁部から胴部上半部が梢円形を呈する異形品である。405は器表の磨滅が進むが小型丸底I式の製塙土器となる可能性が高い。406は弥生土器壺であり、弥生時代前期後半に比定される。407は滑石の原石と考えられ、加工痕は確認できない。

408は大型材であり、全体が炭化している。仕口は確認できないが、法量からみて建築部材である可能性が高い。409は加工棒。尖端部を除いて樹皮が残されている。

410は杭材。下層から単体で出土しているが、検出レベルからみて中層より上位から打設された可能性が高い。

8区溝 SD8001

8区の大半は、遺跡東側の山地に付着する麓面が基盤となる。SD8001は、上面幅約1.5m、残存深度約0.7mを測る。断面形は逆台形から「V」字形を呈し、南から北東方向へ流化する。延長約17mの検出に止まるが、流下方向は遺跡東側の山地に沿ったものであると言え、出土遺物から弥生時代後期中葉から後葉に機能していたと考えられる。

遺跡南方で河川から取水した後、山地を迂回するように裾の麓面を流下し、北東部側に想定される潟湖跡周辺に引水することを目的とした灌漑水路であると考えられる。

411～421は出土遺物である。411は弥生土器複合口縁甌。412の弥生土器甌は口縁部形態に後期前葉段階の特徴をもつもので、後期中葉に比定される。弥生土器甌（414～417）は形態から後期中葉から後葉の時間幅で捉えられる。418～420は弥生土器鉢、421は弥生土器高杯である。

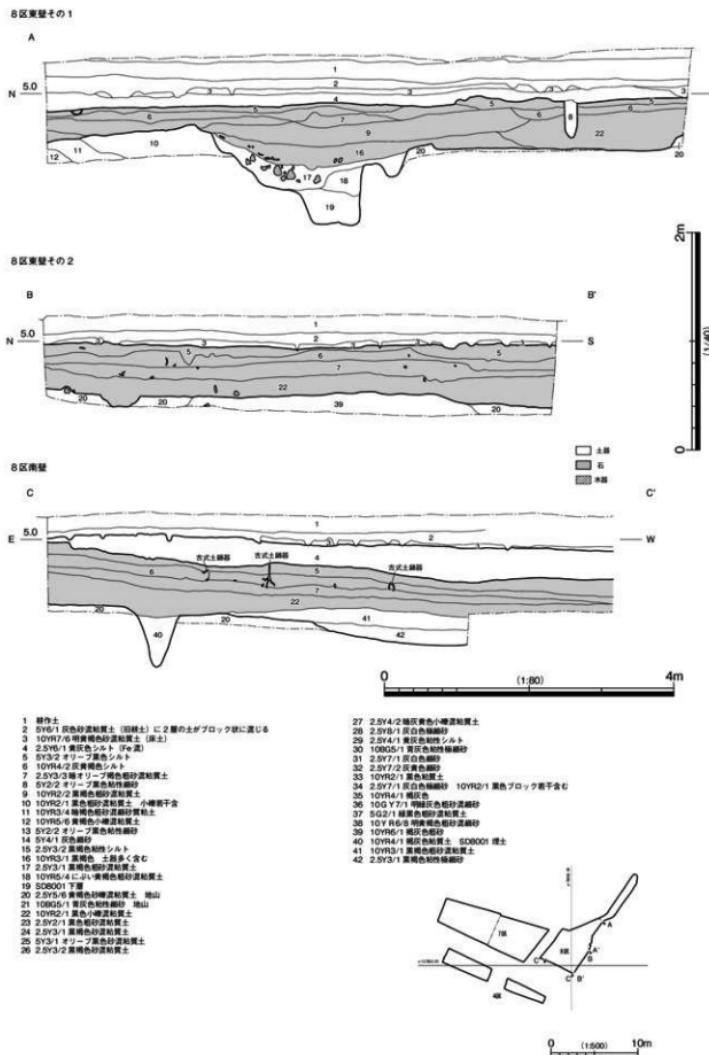


圖 38 8 区古墳時代前期包含層断面

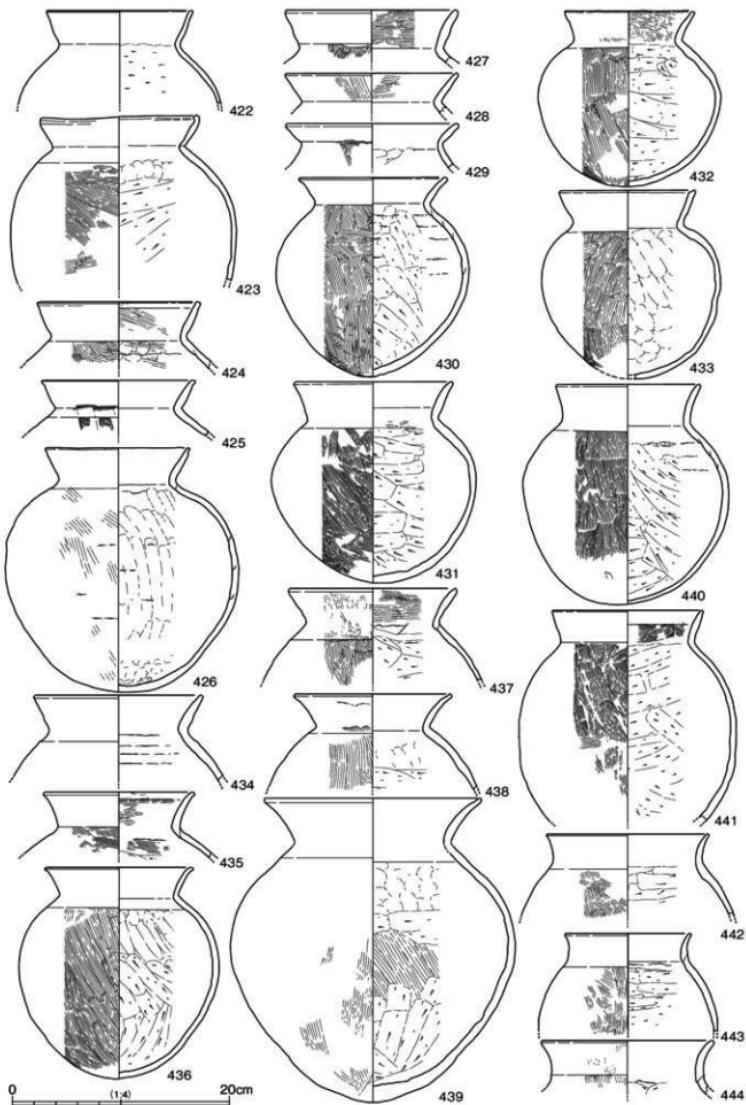


図39 8区包含層遺物(1)

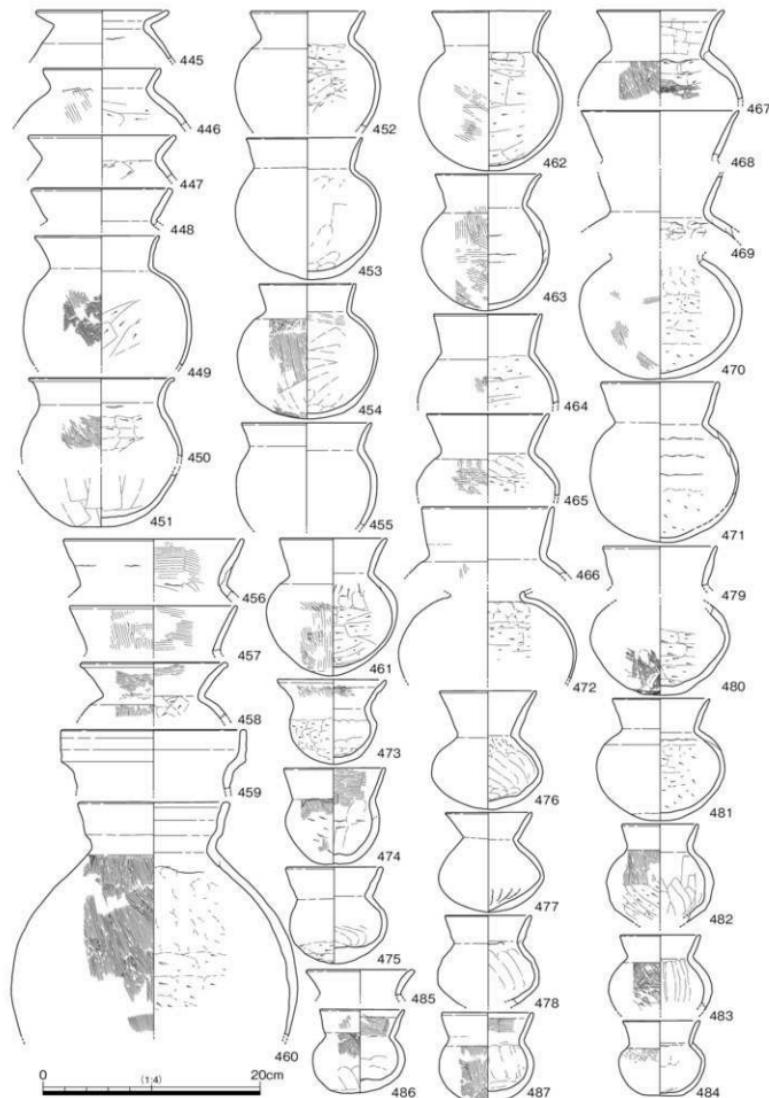


図 40 8区包含層遺物(2)

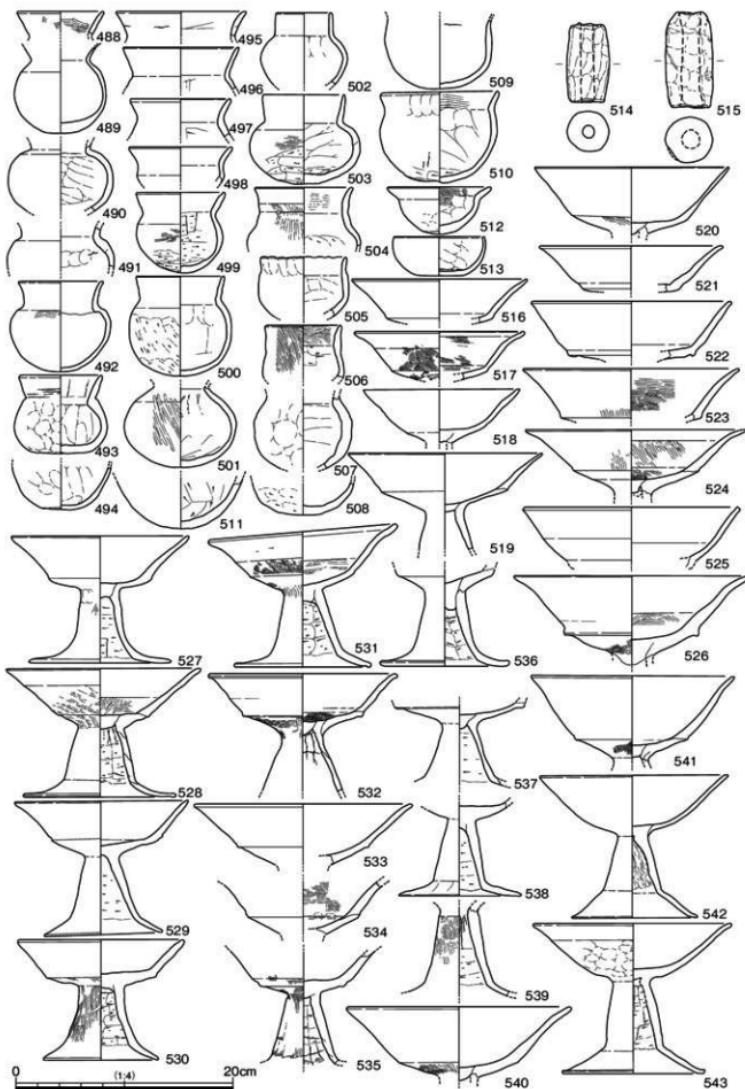


図41 8区包含層遺物(3)

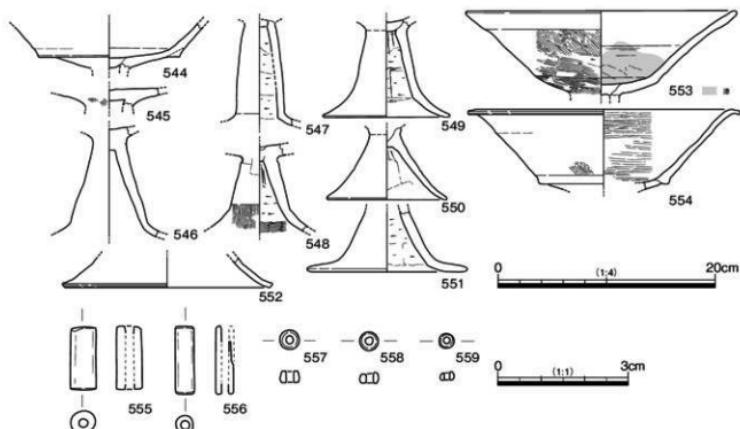


図42 8区包含層遺物(4)

8区古墳時代前期包含層

8区のSR8001・8002を除く全域において、黒色系のシルト～粘土から成る層厚約0.3～0.5mの遺物包含層を検出している。層内には完形に復元可能な古式土師器が多く含まれていた。遺物の遺存状況や層下部の凹凸を考慮すると、包含層ではなく一定程度の期間、遺構形成が継続した際に形成された遺構埋土の累積と考えられる。河川堆積を頻繁に被る1～4.7区の低地部分に比べて、安定した麓層面が居住域として選択された結果であろう。

422～559は出土遺物である。土師器資料群は、古墳時代前期後半の中での型式差・時間幅を含むもので、これらは遺構形成期間を示唆していると考えられる。

422～444は土師器中型甕であり、古相を示す422.423から、新相の433.440までの型式が混在する。445～455.458は土師器小型甕。中型甕422～444と同様に型式が混在した様相を示す。456.457.461～471は土師器直口壺。459.460は複合口縁壺である。473～508.511は土師器小型丸底壺。509.510.512.513は土師器鉢、516～551は土師器高杯である。552～554は土師器大型高杯であり、553の杯部内面には、漆とみられる被膜状の黒色物質が明瞭に付着している。

514.515は土錘である。555.556は滑石製管玉、557～559は滑石製白玉である。

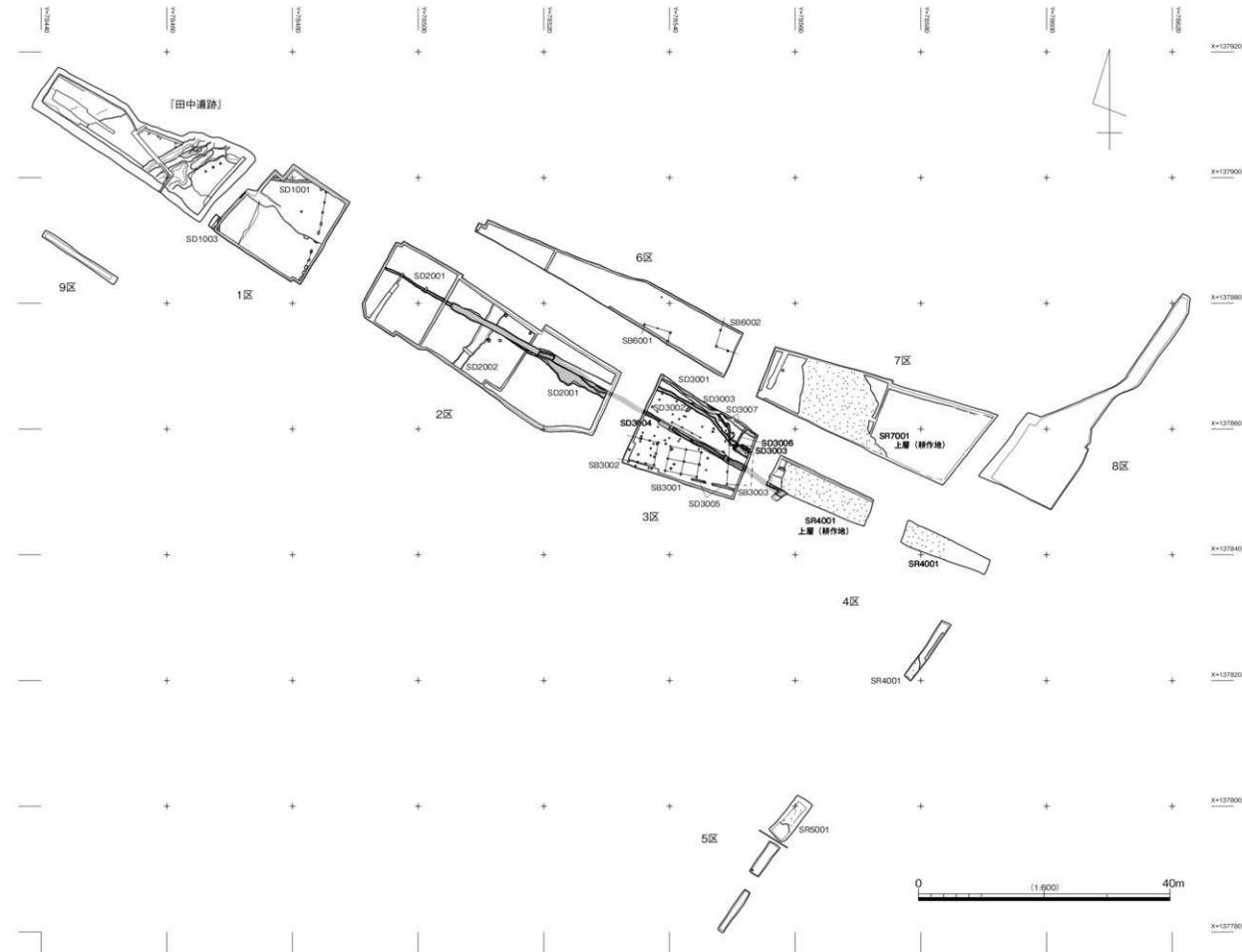


図43 第1面全体図（統合 1 / 600）

第3節 古代以降の遺構・遺物

SR4001・8001の埋没がほぼ完了する7世紀中葉以降は、調査区全域がほぼ平準化した状態となり、掘立柱建物や溝等の遺構が営まれるようになる。掘立柱建物は、3区を中心に座標北から4～15°東へ振れる南北棟と、103°東へ振れた東西棟が分布している。またSD3004等の東西方向の直線溝は、座標北から60°西へ振れて掘開されており、この方位は遺跡北側の条里地割に合致するものである。掘立柱建物と溝群には層位関係があり、後者が後出することが判明しているが、埋没土や出土遺物の特徴からみて、中世の中での遺構変遷と考えられる。

1区柱列

SA1001

1区東部で検出した柱列である。座標北から9°東へ振れた方位をもち、柱間は1.5～1.7mである。柱穴の残存深度は0.1～0.15mと浅く、埋土は遺構検出面上位の中世以降の層位に類似するため、検出面より上位層からの掘り込みであると考えられる。図化可能な出土遺物は見られないが、本遺構周辺に位置し同様の埋没土をもつSP1026から13世紀頃とみられる土師質土器杯(560)が出土しており、これと近い年代が想定される。

SA1002

1区南東部で検出した柱列である。座標北から20°東へ振れた方位を示し、柱間は1～1.2mである。東

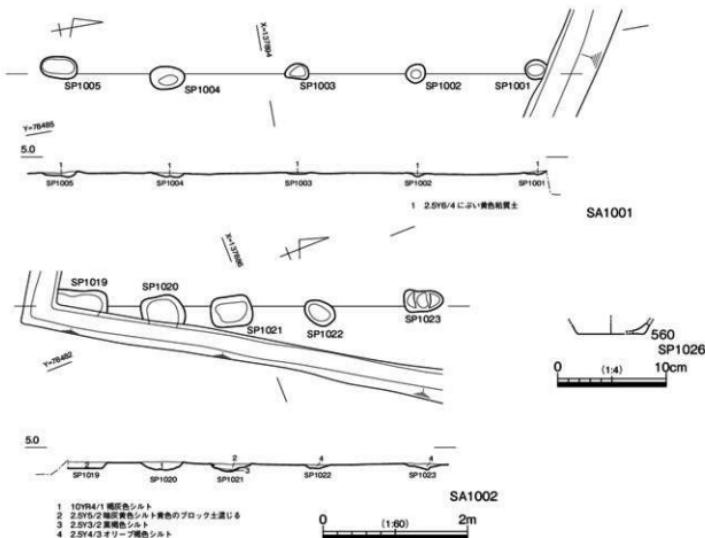


図44 1区 SA1001・SA1002 平・断面及び周辺遺構出土遺物

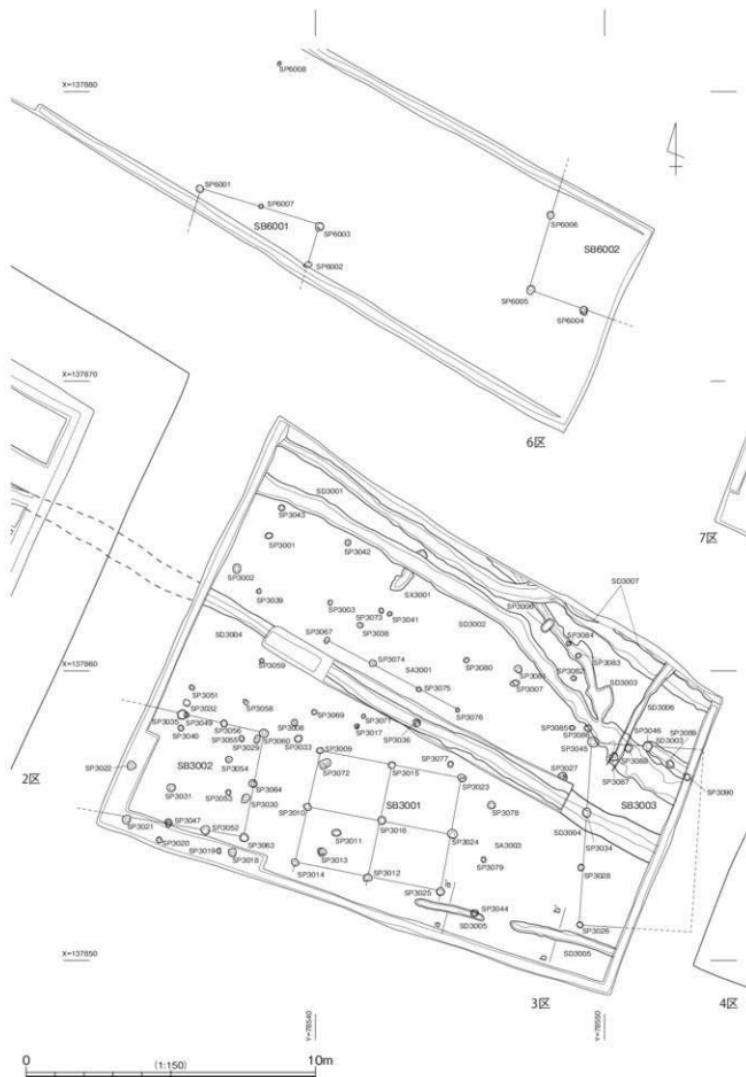


図45 3区・6区第1面 SB分布

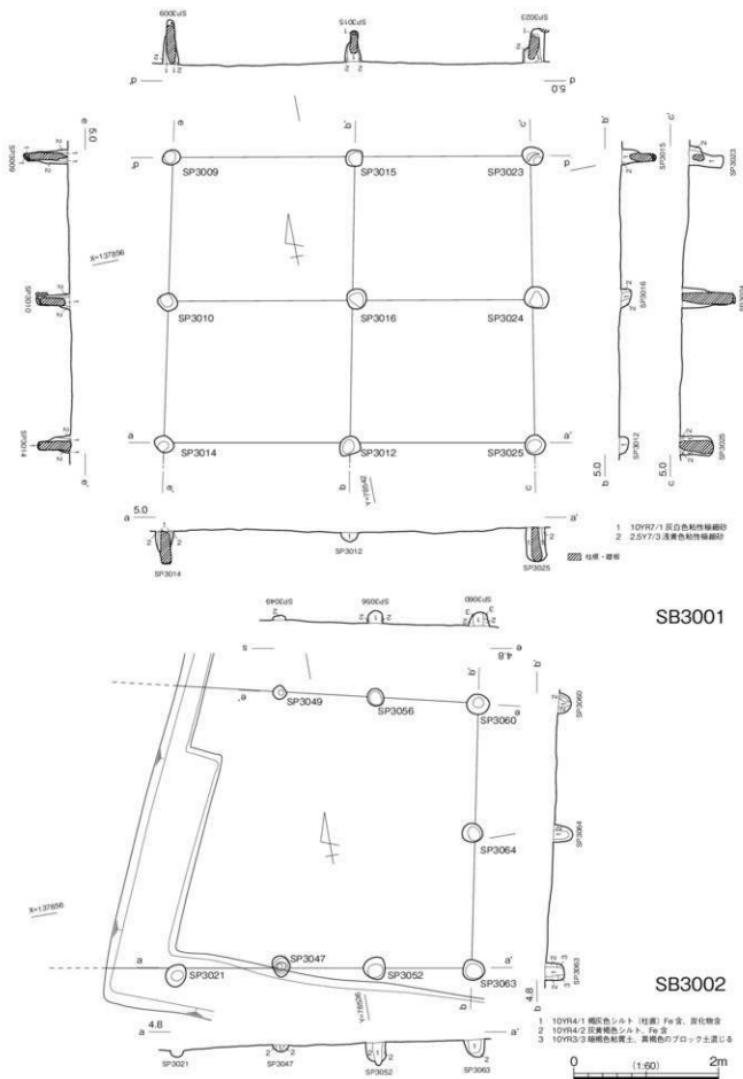


図 46 3区第1面 SB3001・SB3002 平・断面

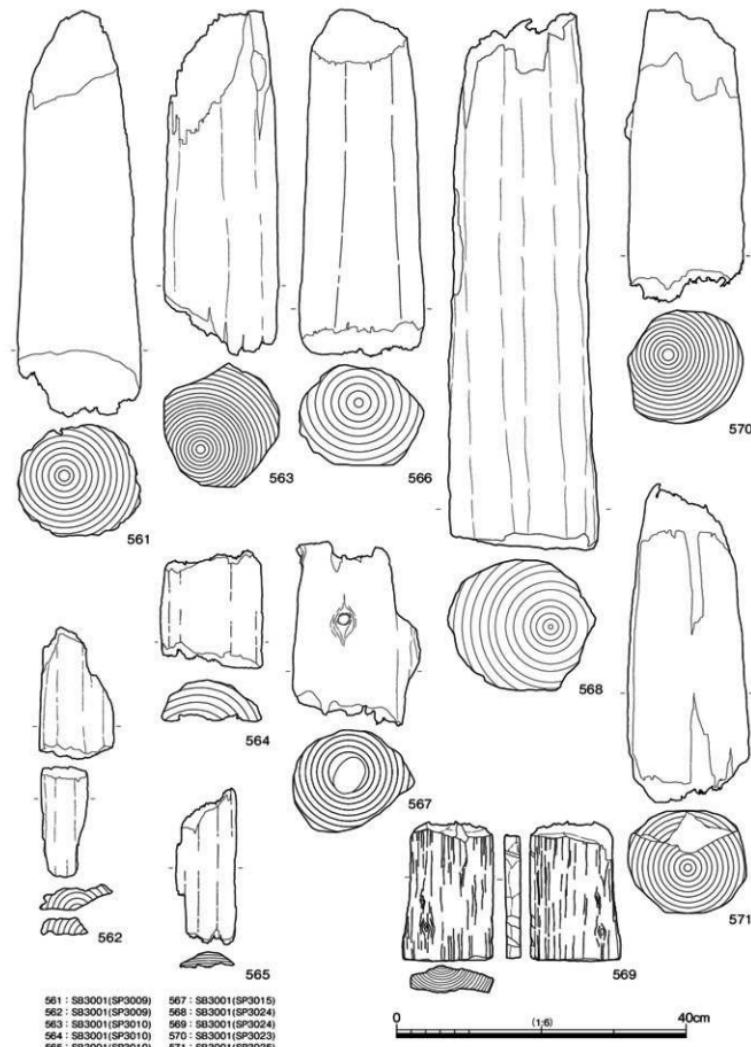


図 47 3区第1面 SB3001 出土遺物

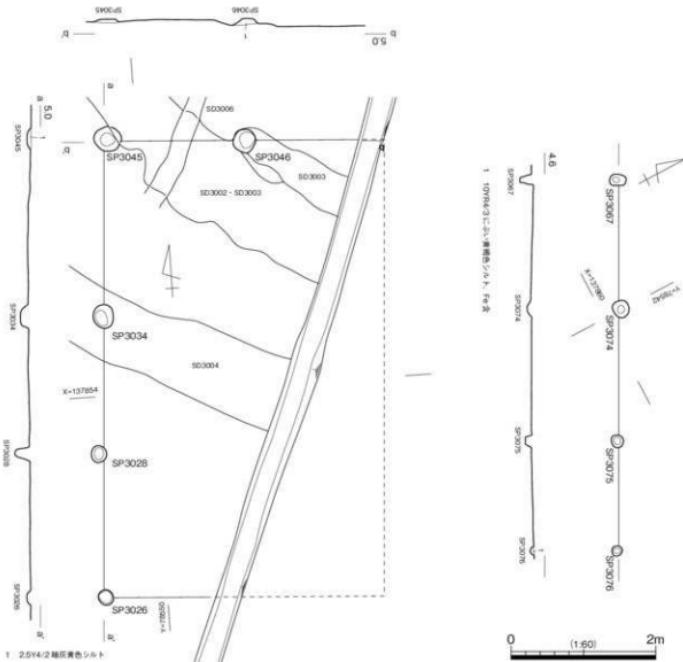


図 48 3区第1面 SB3003・SA3001 平・断面

側が調査範囲外となるため掘立柱建物となる可能性も残る。柱穴残存深度は浅く、埋土が遺構検出面より上位層に類似することから、SA1001 と同様の 13世紀に帰属する遺構と推定しておきたい。

3区掘立柱建物

SB3001

3区南部で検出した掘立柱建物である。建物主軸は 12° 東へ振れる南北棟で、現状で 2×2 間 (5×4 m = 20 m²) の柱配置が確認できる。身舎内部には SP3016, 3012 の柱穴があり、側柱の柱穴が直径 17 ~ 20 cm の柱根が遺存する深度が深いものであることに対して、SP3012 は浅く床東とみられることから、桁行が更に南側に延びる総柱建物と考えられる。また、東桁行の SP3024、北梁行の SP3015、西桁行の SP3009, 3010 では礎板による根固めが確認できるが、更に西桁行の SP3010 では、柱根と掘方の間に板材を詰める根固めを行っている。561 ~ 571 は、柱穴より出土した柱材である。

時期決定可能な出土遺物はみられないが、埋土の特徴や方位が 1区 SD1001 に類似することなどから、7世紀中葉から8世紀前半に属する建物と考えておきたい。

SB3002

3区南西部で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 103° 東へ振れる東西棟であり、現状で 2

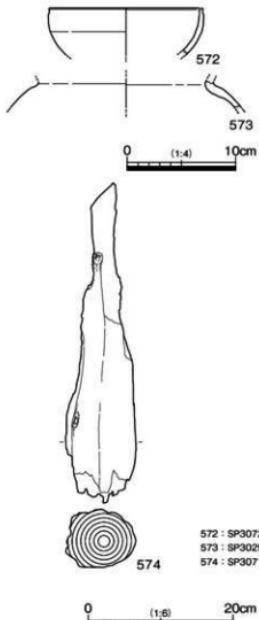


図49 3区柱穴出土遺物
572 : SP3072
573 : SP3029
574 : SP3071

6区掘建柱建物

SB6001

6区東部で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 15° 東へ振れる南北棟であり、現状で 2×1 間以上の柱構造を窺い知ることができる。また、一部、図に表現できていないが、SP6001.6002.6003には直径約10cmの柱根が遺存している。柱根の樹種ヒノキ、又はヒノキ科で占められている。

時期決定可能な出土遺物がみられないが、建物方位や埋没土の類似性からみて、SB3001と同様に7世紀中葉から8世紀前半に属する建物と考えておく。

SB6002

6区東部で検出した掘立柱建物である。現状で主軸方位の確定が難しいが、柱間の長さを根拠として、座標北から 115° 東へ振った 1×1 間以上の東西棟と考えられる。SP6004から578の板材が出土しているが、底面から約20cm高い位置で出土していることから礎板と考えることはできない。建物廃絶に伴う柱抜き取り時に投棄されたものであろう。時期決定可能な出土遺物はみられないが、建物方位や埋没土の類似性からみて、3区SB3001と同様に7世紀中葉から8世紀前半に属する建物と考えておきたい。

×3間(3.6×4.2m)の柱配置をもち、桁行は更に西側の調査区外へ延びると考えられる。東側に隣接するSB3001とは東側梁行の間隔は約2mとやや接近するが、北側桁行がSB3001の北側梁行に合致することから、本建物とSB3001は同時併存すると考えられる。時期決定可能な出土遺物がみられないが、SB3001と同様に7世紀中葉から8世紀前半に属する建物と考えておきたい。

SB3003

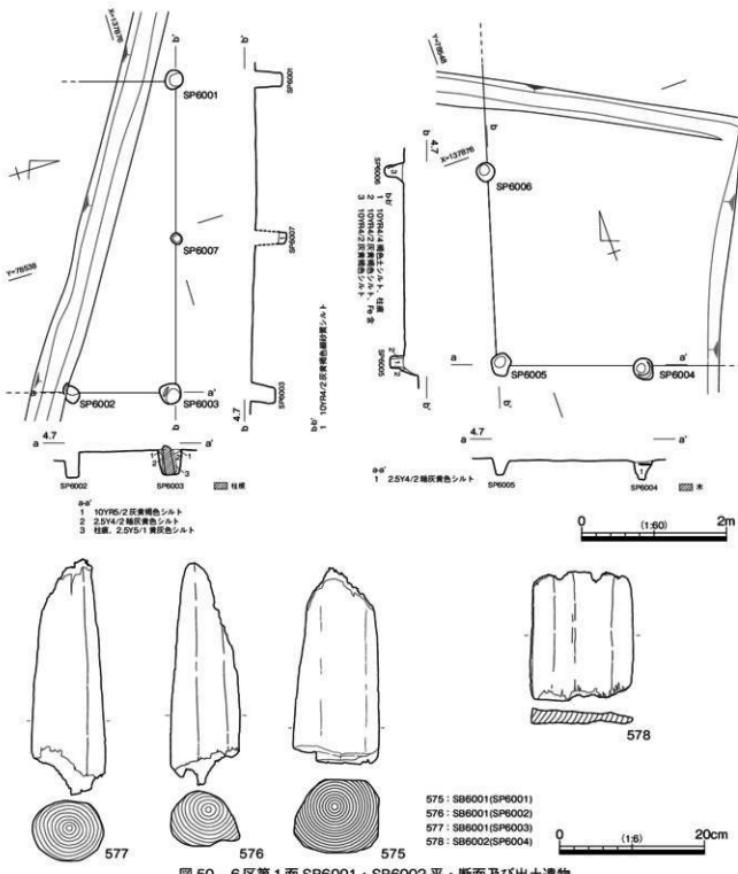
3区東部で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 4° 東へ振った南北棟であり、SD3004に切られる。東側桁行と北・南側梁間の一部が調査区外となるが、現状で梁行2間以上、桁行3間(6.3m)の柱構造が確認できる。出土遺物は確認されなかつたが、埋没土の類似性や中世に属するSD3004に切られることから、SB3001と同様の7世紀中葉から8世紀前半に属する建物と推定しておく。

3区櫛列 SA3001

3区中央部で検出した3間の柱列である。主軸方位は座標北から 118° 東偏するもので、周辺の掘立柱建物とは異なる。主軸方位は南側のSD3004に類似するため、掘立柱建物群に後出する中世の柱列と考えておく。

3区柱穴出土遺物

図49は、3区で建物復元に至らなかった柱穴からの出土遺物である。572は3区SP3072から出土した土師器杯であるが、下位に存在する河川堆積層からの混入品と考えられる5世紀後葉～末葉の資料である。573はSP3029から出土した土師器壺で、572と同様に下位層からの混入品と考えられる。574はSP3071から出土した柱材である。樹種はヒノキ科である。



1区溝 SD1001

1区北部で検出した東西方向の直線溝である。座標北から 95° 東へ振れる方位をもつ。恒常的な流水状態は観察されず、暗灰色シルトの單一層で埋め戻されている。出土遺物は 579 の須恵器杯と 580 の土師器甕がみられる。579 は 5世紀末葉に比定され、下位の河川堆積層からの混入品であると考えられる。土師器甕口縁片 (580) は詳細な時期比定に困難を極めるが、6世紀～7世紀前葉の甕と比較して強いヨコナデが認められること、口縁端部の構み上げが 8世紀中葉以降の資料と比較して顕著ではないことを根拠として、7世紀中葉～8世紀前葉の所産と推定し、本溝の年代の一端を示す資料としておきたい。また、本溝と同様の方位をもつ SD1003 や、3区 SB3001 等の掘立柱建物群の時期を推定する根拠の一つとして報告しておく。

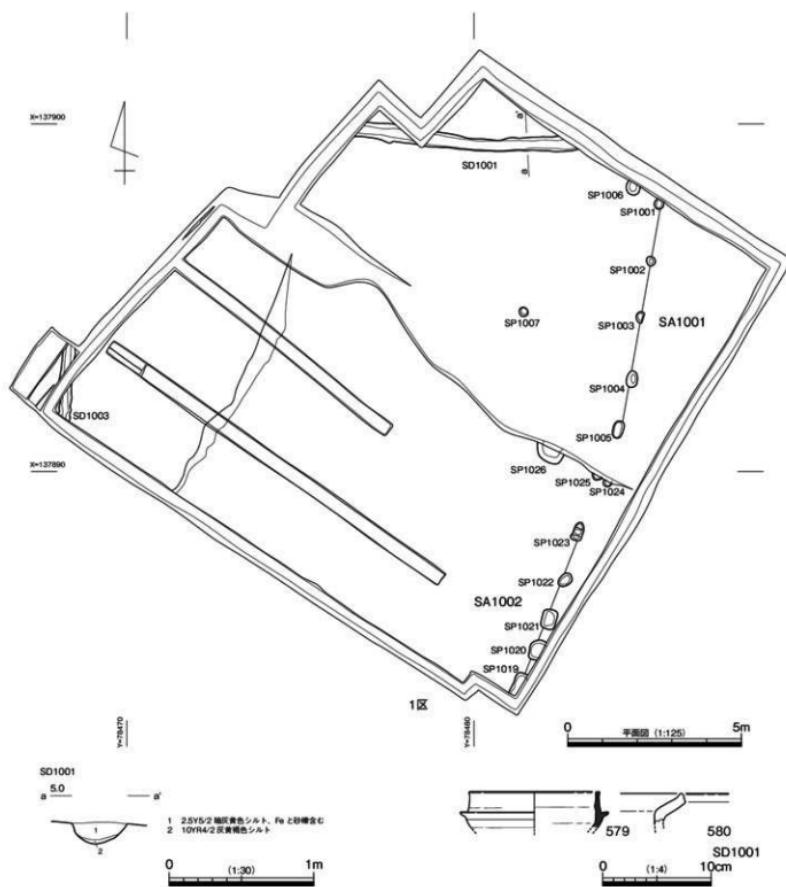


図 51 1区 SA1001・SA1002・SD1001 平・断面及び SD1001 出土遺物

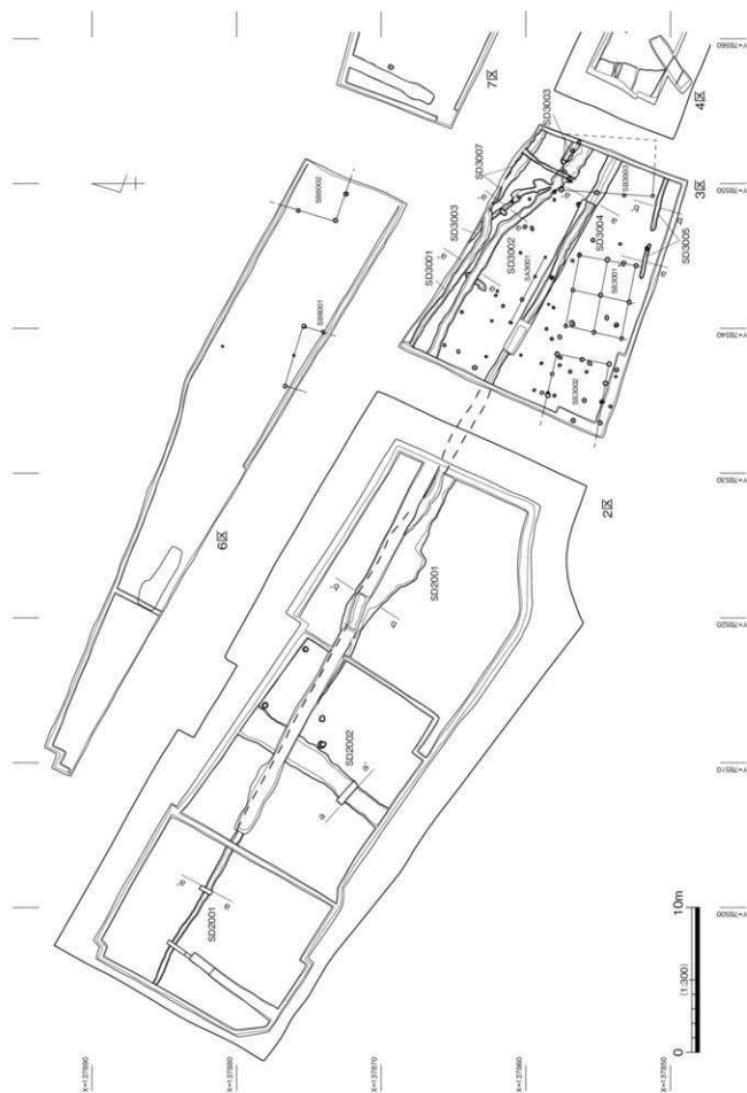


図 52 2・3区溝平面

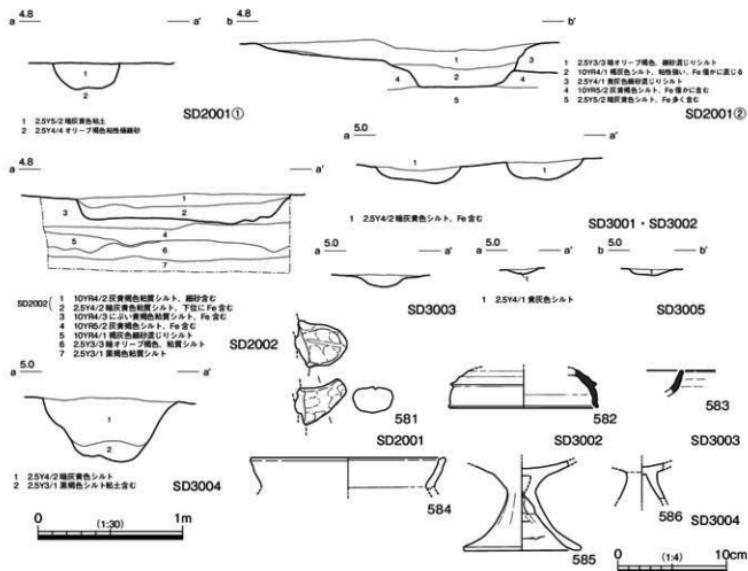


図 53 2・3区溝断面及び出土遺物

2·3区清 SD2001·SD3004

2・3 区中央と東西に貫通する直線溝である。調査区が異なるため別の遺構を与えているが、検出位置からみて同一溝であり同時に報告する。方位は座標北から 60° 西へ振れるもので、跡跡北側に遺存する条里地割に合致し、3 区では SB3003 を切る。埋没土は灰色系のシルトであり、部分的に底面付近に流水痕跡のある薄層が確認されている。主体となる灰色系のシルトは、遺構検出面上位にみられる中世以降の耕作土の層相に類似している。出土遺物は土師器瓶取手 (581)、土師器甕 (584)、土師器高杯 (585, 586) がみられるが、これらは下位の河川堆積層からの混入資料と考えられる。7 世紀中葉から 8 世紀前葉と推定した SB3003 を切ること、埋没土が遺構検出面上位の中世以降の耕作土に類似することなどを根拠として、中世に属する溝として報告しておく。

2区満 SD2002

2区中央部で検出したSD2001に直交する南北溝である。SD2001に切られた状態で調査が行われているが、残存深度は0.2mに過ぎないことや、埋没土がSD2001に類似する灰色系のシルトであることなどから、同時に併存の可能性も否定できない。固化可能な出土遺物はみられなかつたが、ここではSD2001と同様に中世に属する構造として報告しておきたい。

3区港 SD3001 他

3区ではSD3004の北側でほぼ平行してSD3001, 3002, 3003, 3007を検出している。SD3001とSD3003は切り離された複数の枝をもつ。

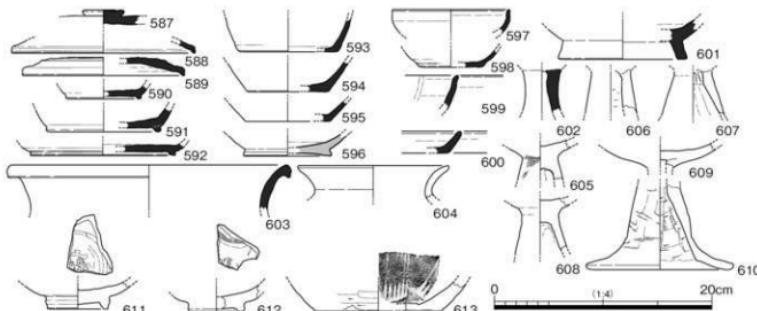


図 54 上位包含層出土遺物

合い関係をもつ形で調査されているが、残存深度は約 0.1 m と浅く、埋土にも大きな差異が認められないことから、一連の構群として報告することしたい。埋土は灰色系シルトであり SD3004 と類似するものである。2 区と 3 区からの延長線上は現水路となり調査区外となるが、SD2001, 3004 と平行する形で同時併存していたと推定できる。時期比定可能な出土遺物はみられなかったが、SD2001, 3004 と同様に中世に属する構群と報告しておきたい。

遺構検出面上位耕作土出土遺物

図 54 は、遺構検出面より上位にみられる中世以降の耕作土から出土した遺物を一括して掲載している。特記すべき遺物として、削り出しによる円盤状高台をもつ綠釉陶器壺 (596) があり、9 世紀後半の資料とみられる。